

聴覚障がい者が感じる聴者とのコミュニケーションの障壁についての 面接調査^{1, 2}

逸見 知美³ 石村 郁夫⁴

本研究は、聴者と聴覚障がい者の関係を築く上でのコミュニケーションの障壁の存在に着目し、面接での聴覚障がい者本人の語りから、聴者とのコミュニケーションにおける障壁をどのように体験し、感じ、認識し、そしてどのような対処行動をとるのかといったプロセスを明らかにすることを目的とした。1時間程度の半構造化面接を、聴覚障害をもつ18～30歳の7名（男性5名、女性2名）に行い、その様子を録音・録画した後に逐語録に起こした。分析はM-GTAを用いて行い、18の概念と7つのカテゴリーが生成された。7つのカテゴリーは、①【誤解や差別の体験】、②【通じない体験】、③【否定的な自己イメージ】、④【聴者に対する抵抗感】、⑤【諦めと切り替え】、⑥【割り切る】、⑦【予測する】であった。これらの結果から、聴覚障がい者は、聴者とのコミュニケーションにおいて、誤解や差別の体験や通じない体験によって、否定的な自己イメージや聴者に対する抵抗感、諦めと切り替えといった気持ちの変化が起こり、聴者との関係を割り切ったり予測したりするといった対処行動をとることが示された。

キーワード：聴覚障がい、ディスコミュニケーション、面接調査、M-GTA

問題と目的

聴覚に障がいをもつとはどういうことだろうか。聴者にとっての音声情報とは、生活の中に当たり前のように存在し、日本語の慣用句“話を聞き流す”にもあるように音声情報は聞き流されていることも多い。津名(2005)は、人間がもつ音声コミュニケーションというものの根源性を指摘している。つまり、人間が空気の存在を日常意識しないように、聴者にとって音声コミュニケーションが生理的に密着していて、自然かつ努力なく行える上に“物”としてみえないことから、その部分に障がいをもつ人々の状況を理解する想像力を、聴者はほとんど持ちあわせていないようなものである。さらに、永石(2012)は、聴覚障がいの見えにくさを指摘しており、聴覚障がいへの理解を難しくしている要因として、視覚的に障がいが見えにくいことや聴覚障がいというものが多様であることを挙げている。その多様さの要因として、滝沢(1999)は、個人の聴力パターン、補聴器の性能、調整の仕方により聞こえ方が違ってくことや、受けた教育・生活環境も様々であることを指摘している。実際に、聴覚障がい者といってもそれぞれに適したコミュニケーションをもち、一括りにはできないと考えられる。

聴覚障がいをもつということは、聞こえない・聞こえづらいというだけでなく、2次的障がいとしてコ

ミュニケーションに関する問題や不安を抱えやすいことが指摘されている。その中で、鳥越(2008)は、聴覚に障害をもつ子どもの周りの大人たちは、とかく耳が聞こえないこと、ことばの獲得がむずかしいことばかりに目がいきがちになるが、しっかりとコミュニケーションできる関係性があること、それを支援することが必要であると述べている。そこで筆者はコミュニケーションを取る上での問題の前に、まずはコミュニケーションできる関係性を作ることが重要であると考え。しかしながら、聴覚障がい者に対する心理支援においては、コミュニケーションの問題により、聴者から聴覚障がい者への接近は困難であることから、研究の蓄積が少ない状態にある(松浦・山下, 2007)。山口(1998)による聴覚障がい学生を対象にした研究では、聴者の世界との葛藤により、聴覚障がい学生の自主性や親密性、他者への信頼感などの心理社会的発達にネガティブな影響が示され、聴者と対等なコミュニケーションを行うことに関する自信がないことが心理社会的発達を妨げる重要な要因となっていることが明らかになっている。

ところで、障害者福祉法の制定や補聴器・人工内耳など残存聴力活用のための技術が向上したことによって、聴者集団の中で社会生活を送る聴覚障がい者数は増加していると考えられる。そのため、社会の制度や

3 東京成徳大学大学院心理学研究科

4 東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科

1 2013年度東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。

2 調査にご協力頂きました皆様により感謝申し上げます。

理解が追いつかないまま、聴者に理解されていないことによって起こる問題も少なくない。このことから、聴覚障がい者に共通している特性ともいえるものを理解した上で、聴者と聴覚障がい者の関係について検討することの重要性は高まっている。

そこで本研究では、聴者と聴覚障がい者の関係を築く上でのコミュニケーションの障壁の存在に着目し、面接での聴覚障がい者本人の語りから、聴者とのコミュニケーションにおける障壁をどのように体験し、感じ、認識し、そしてどのような対処行動をとるのかといったプロセスを明らかにすることを目的とした。

方 法

調査協力者

関東に在住の聴覚障がい者7名（男性5名、女性2名）で平均年齢は23.3歳（SD=3.6）であった。

調査手続き

2013年11月下旬に調査協力者の職場または住居近くの貸し会議室、学生に関しては大学の教室で実施された。はじめに、本研究の目的、個人情報の保護、また、本研究への協力は自由意思に基づくものであり、参加の拒否による不利益は一切生じないことを説明し、同意書への署名を求め、続けて質問紙への回答を依頼した。質問紙への回答後、体調等の確認をしてから面接調査を開始した。形式としては1時間程度の半構造化面接で、同意を得た上で面接の様子を録画・録音し、面接後に録画・録音したデータから逐語録を作成した。逐語記録が保存されたUSBメモリは施錠可能な引き出しに保管し、調査対象者の個人情報の漏洩がないように配慮した。

調査内容

調査協力者の性別、年齢、失聴時期、教育歴（ろう学校のみ・普通校のみ・両方）、両親の聴覚障がいの有無（聴・ろう・その他）に関する基本情報を尋ねた（Table 1参照）。また、円滑に面接調査を進めるために聴者とのコミュニケーションで生じる障壁に関して自由記述の回答を求めた。

分析方法

聴覚障がい者と聴者のコミュニケーションの問題の中には個人レベルを越え、聴覚障がい者共通の体験として理解するべきものがあると考えた。そこで、個人の内面だけでなく日常生活まで視野を広げて聴覚障がい者と聴者との相互作用を取り上げることが重要視する。木下康仁（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）は、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究や研究対象とする現象がプロセス的性格をもっている

Table 1 調査協力者の概要

	性別	年齢	失聴時期	教育歴	両親
A氏	男性	18歳	3～4歳	両方	聴者
B氏	男性	21歳	1歳	両方	聴者
C氏	女性	21歳	0歳	両方	聴者
D氏	女性	23歳	1歳	両方	聴者
E氏	男性	30歳	0歳	両方	聴者
F氏	男性	26歳	0歳	両方	聴者
G氏	男性	24歳	0歳	両方	聴者

場合に適しているという性質があり、本研究の目的に合致するためこの方法を用いた。

結果と考察

M-GTAの分析手順に従い分析ワークシートを作成した結果、18の概念と7つのカテゴリーが生成された。本研究では調査協力者が少人数であったが、分析中に比較的安定した概念構成に至ったため、理論的飽和に達したと判断した。分析ワークシートの1例をTable 2に、カテゴリーと概念の一覧をTable 3に示す。以下、カテゴリーは【】、概念は〔〕で示す。

1. ストーリーライン

聴覚障がい者と聴者とのコミュニケーションの障壁について、聴覚障がい者が体験しているプロセスは、聴者とのコミュニケーションにおけるネガティブな体験とそれに伴う感情の変化を経て実際の行動をとるといった流れである。聴覚障がい者は、【誤解や差別の体験】や【通じない体験】をしており、その両方が彼らの心の中に【否定的な自己イメージ】や【聴者に対する抵抗感】を生み出し、体験や感情の積み重ねによって【諦めと切り替え】の気持ちをもつようになる。そして、【聴者に対する抵抗感】から表情などから【予測する】という行動をとりやすくなり、【否定的な自己イメージ】や【諦めと切り替え】から【割り切る】ことで必要最低限は自分から関わりをもつことが明らかになった。（Figure 1参照）

2. カテゴリーごとの概念の説明

<体験カテゴリー>

(1) 【誤解や差別の体験】

カテゴリー【誤解や差別の体験】は、〔誤解される聴覚障がい者〕〔傷つき体験〕の2つの概念から構成された。

〔誤解される聴覚障がい者〕では、「まあ聴覚障害は見えない障害だから。そういう特徴があるんだけど、（中略）聞かれた時に分かんなくて応えきれなくて、あちよっと待ってください！みたいな。私に対応できないから、他のスタッフがっていうことで、まあ

対応してもらおうように。まあそのスタッフも、どっか行っちゃうから。早く捕まえないと。で、そこから捕まえてきた時に、お前に聞いてんだよって言われて。」「コミュニケーションを取るときに、自分はこう言いたって伝えようと思って、(中略)友達が怪我をしたのはお前のせいだよと言われてまして、でも僕は、僕じゃないですって言った、言ったんだけど、それでも信じてもらえなくて、やっぱり結局、自分のせいになって、友達も先生も、僕のせいだっていうことで、なんか・・・結果的になってしまって」など見目で聴覚障がいをもっていると気付かれずに誤解されたり、コミュニケーションの問題で誤解されたりする経験があった。

〔傷つき体験〕では、「耳をこう引っ張って、補聴器・新しい補聴器に替えさせるぞ・みたいなことを言われました。言われて、・・・とても苦しく・やしい、なんだろうな、その時は分からなかったけど、たぶん今の自分にとっては、トラウマになっていると思います。今でもまだはっきりと覚えているし、たまに夢に見てストレスが溜まることもあります。」「例えば、道を聞かれたりとか、・・・とか、あの・逆に道聞いたりとか。私聞こえないんで、こうしてほしいんですけど、聞いた時の・・・その・相手の表情が・もう・・・忘れられないっていうか。ちょっとしたときに、ふと思いで出して、もう嫌！ってなる。」「多分・障害者・にとっては、絶対に・歩く道だと思わんですけど・まあいじめ・があって、いじめられると・やっぱり・なんだろう・内向・・・引きこもり・みたいな心が、相手に対して・引きこもってしまうので、諦めたり、傍観しようかな・とか、そういうふうな・考え方・に傾いてしまうのが多いと思います。」などの傷つき体験に今でも苦しんでいることが語られた。

(2) 【通じない体験】

カテゴリー【通じない体験】は、〔どこに行っても同じ壁〕〔言語や文化の違い〕〔聴者との情緒的関わり

の困難さ〕の3つの概念から構成された。

〔家族の中でもコミュニケーションの壁があって。(中略)そういう環境にずっと居たから、大学だけじゃないんだよね。小さい時からもうずっとその同じ環境に・・・どこに行っても同じ。〕「最初は、障害者・っていうだけで、どうして・普通の人と同じように出来ないのかなあと思ってたんですけど、そこ・もう・何っ回も同じ対応をされたり、違う人から・色んなひとから・同じ対応をされると、これが当たり前、って・世間では常識なのかなあって、まあ・洗脳に近い感じ・になってしまうのかなあって思ってます。」など、生活環境が変わろうと〔どこに行っても同じ壁〕を感じている聴覚障がい者の姿が捉えられた。

〔言語や文化の違い〕では、「口話を使っただけで手話を表すと日本手話じゃない、日本語対応手話みたいな状態になって、(中略)頭の中で整理しながら手話を使うのはすごく疲れた。」「ろう者が手話を出す時は、なんていうんだろなあ、・・・ほぼほぼ読み取れる。けど、聴者が手話を出す時に、私はそのイメージで言ってるのかなあって想像しながら読み取る。(中略)手話が出来る人でも私が読み間違える事もある。だから、・・・安心して読み取っている訳でもない。」など、手話であっても日本手話と日本語対応手話ではズレがあることや、「最初は日本手話で・手話だけで育ったので、文法を作る・構成が、日本語対応手話と全く違うので、自分がこの文章でいいと思ってても、他の人から見れば変な文章になっているので、なんか・・・」など日本語の文章を考える時の困難を挙げていた。さらには、「考えさせられるっていうか。文化の違いを。やっぱ違う。同じ日本人なのに違うんだな、みたいな。」という言葉に象徴されるように、同じ日本に住んでいても文化が違うことも挙げられた。

〔聴者との情緒的関わり〕では、「会社は会社で、友達は友達で、まあ、別なんですけど、恋愛は本当に、悩みはいっぱいありますから。そうですね。そ

Table 2 分析ワークシート例

概念名	聴者の気持ちを視覚で察する
定義	聴者の心情を視覚情報から察する習慣。
ヴァリエーション	多分向こうもかなり気を遣っていたりしてたんだと思うんだよね。あ、どうしようみたいなのは思ってたんだと思うから。 相手の表情で、まあ・例えば、その普通に・あ・分かりましたって言ったらもう笑顔で・まあ優しくしてくれるから・気持ちも・軽くなるし、でも・そうじゃないと、なんか・めんどくさい・とか、・・・あ？何だこいつみたい、嫌そうな表情されちゃうと、なんか・・・・なんだろう・・・・なんでっていうよりも・・・じゃあ聞かなきゃよかった・みたいな。(以下略)
理論的メモ	聴者が戸惑っていることや気遣っているのだからという理解・またはそのことを感じ取っている様子が見受けられる。 表情によっては聴者と関わりやすくなる？ (以下略)

うなってくると大事なところでこう、…何か通じなかつたりとかなると、うわあーってなりますから。」「人間関係を作るためにはコミュニケーションが必要じゃん。(中略)でも聴者とはそれがなかなか、難しいんだと思う。聴覚障害もあるし、声もある、声も難しい。ツール・何かを使わないと、話せない。」「バイトの方が、基本的には楽。大学の方が大変。」など、仕事などの事務的な関わりよりも、情緒的な関わりのような深い関係になることに困難を感じているようである。

＜感情の変化カテゴリ＞

(3) 上記の体験からくる【否定的な自己イメージ】

カテゴリ【否定的な自己イメージ】は、〔罪悪感と劣等感〕〔聴覚障がいに対する否定的なイメージ〕〔聞こえることへの羨ましさ〕の3つの概念から構成された。

〔罪悪感と劣等感〕では、「何回かも、話すんだけど、分かんないからもう1回もう1回っていうふうに、だんだんもうめんどい・みたいな・ってなる時も、…私がダメじゃんみたいなのに、そこはもやもやしてなる。」「自分は健聴になれないから、いじめられるんだ、みたいな。うん・・・、自分は普通の人間と違うから・いじめられるんだなあとか、そういうイメージがあったんだと思います。」など、通じないことや差別を受けたこと等のネガティブな体験から、罪悪感や劣等感

を感じるようになっていたことが示された。

「自分の障がいを、認めてもらいたくないのに、隠しちゃ自分がいるみたいな。」「周りに・自分みたいな人が1人も居なかったから、自分がおかしいとか、自分の事・が・なんか・受け入れられなかった、そういう状態・だったんですよ。」など、〔聴覚障がいに対する否定的なイメージ〕をもち、それを受け入れたくない気持ちが語られた。

〔聞こえることへの羨ましさ〕では、「なんか、健聴っていいよねって。普通に話せていいよねって、電話も出来ていいよねって。」「なんか・こう、周りが聞こえるから、もうスムーズに、動いてるから、で・私の中で止まって、なんか・動きたいけど動けないっていう。・・・なんだろう、それを見て・あちよつといいなあーって、自分が聞こえれば良かったとか、..そういううらやましさ」など、聞こえることへの羨ましさが語られると同時に、聴覚障がいをもつもどかしさを覗かせた。

(4) 【聴者に対する抵抗感】

このカテゴリは、〔身構える気持ち〕〔聴者に対する遠慮〕〔聴者の中での孤独感〕の3つの概念から構成された。

〔身構える気持ち〕では、「もうある程度気にならなくなった・と言っても、けっこう・なんていうの、

Table 3 カテゴリと概念の一覧

【カテゴリ】	〔概 念〕
【誤解や差別】の体験 (7)	・〔誤解される聴覚障がい者〕 ・〔傷つき体験〕
【通じない体験】(6)	・〔どこに行っても同じ壁〕 ・〔言語や文化の違い〕 ・〔聴者との情緒的関わり の 困難さ〕
【否定的な自己イメージ】(5)	・〔罪悪感と劣等感〕 ・〔聴覚障がいに対する否定的なイメージ〕 ・〔聞こえることへの羨ましさ〕
【聴者に対する抵抗感】(7)	・〔身構える気持ち〕 ・〔聴者に対する遠慮〕 ・〔聴者の中での孤独感〕
【諦めと切り替え】(7)	・〔仕方がない〕 ・〔自分で何とかするしかない〕 ・〔要求しなきゃ生きていけない〕
【割り切る】(6)	・〔コミュニケーションが取れる人取れない人〕 ・〔受け入れて前へ進む姿勢〕
【予測する】(6)	・〔聴者の気持ちを視覚で察する〕 ・〔経験からの推測〕

() は言及した人数。

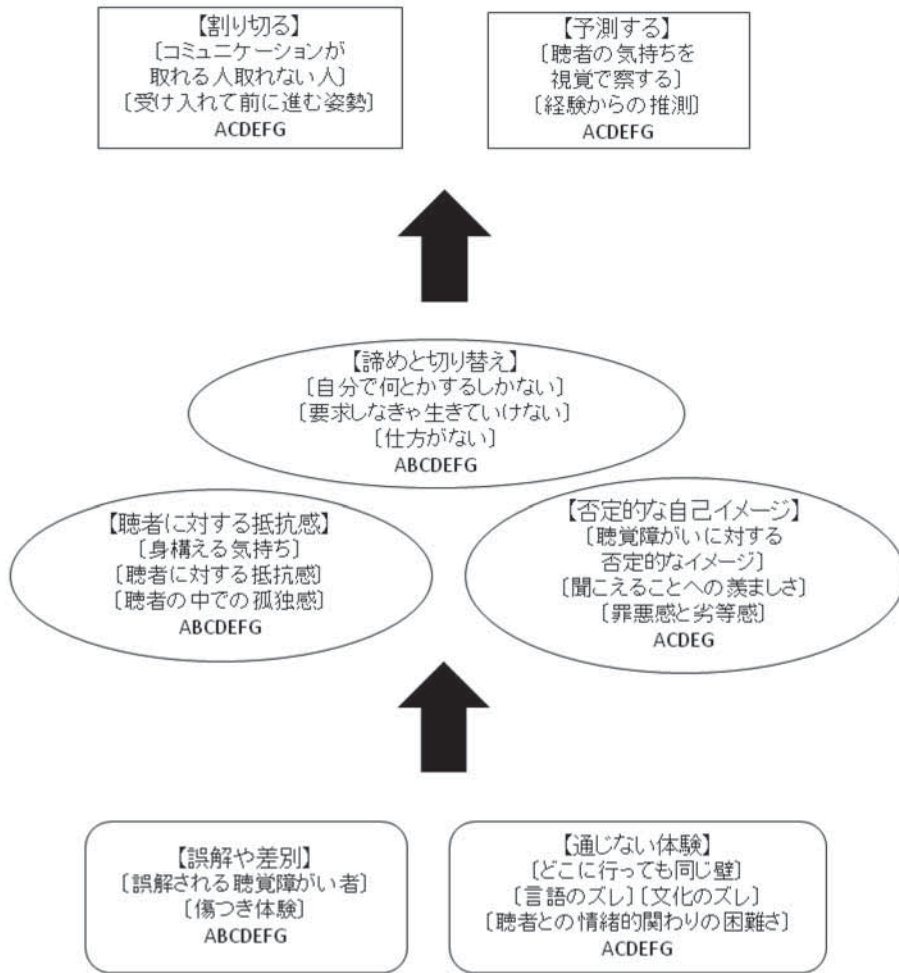


Figure 1 聴覚障がい者が感じる聴者とのコミュニケーションにおけるプロセス概念図

言い出すのに勇気が要る・みたいな、は・ある。不安になって。」「家はろう者が自分だけ、他のみんなは普通に口を使うから、私だけ手話を使っていると、周りからどんな目で見られているのか怖い気持ちがあったと思う」など、聴者に対する不信感や恐怖感があることが示された。

「その時の・この・空気を壊したくない・みたいな気持ちが・強くて。」「聴者に対して・今私がここに居たらどう思うのかっていうことに気づくようになった。例えば・・・、ごはんを食べる時にくちやくちやく。それが聞こえるじゃん聴者は。聞こえるから汚いって言うでしょう。私は分からないから、仕事仲間と一緒に行く時はすごく気にする、みたいな。」など、[聴者に対する遠慮]を日常的にしていることが示された。

[聴者の中での孤独感]では、「私だけ浮いてる」「晩御飯の時間が一番嫌でしたね。もしかしたら僕だけじゃなくて、他のろう者も同じような経験をしていると思います。はい。というよりも、ほとんど状況が分

からなくて。」など、聴者集団での会話で取り残されているような孤独感があることが語られた。

(5) 【諦めと切り替え】の気持ち

このカテゴリーは、[仕方がない][自分で何とかするしかない][要求しなきゃ生きていけない]の3つの概念から構成された。

「言って・・・どうなるの？みたいな。うん。何も変わらないんじゃない？みたいな感じ・だと思ってます。」等、何回言っても改善されなかったことからの諦めや、「障害者だけが特別じゃない、そういう事を考えたら・キリがないから、まあいいやって。そう思った方が楽って思えた。」求めてもキリがないという気持ちから、[仕方がない]と思うようになっていった変化がうかがえる。

[自分で何とかするしかない]は、「社会に出たら・手話を使えるあんまり居ないと思うので、手話から筆談とかでのコミュニケーションが増えた・増えたと思

います。なので、今のうちに筆記力とか文章力を上げないと、と思っています。」「もうそういう環境だったんで。まあ一気にもう居なくなる感じだったので。そうなるともう、自分の努力しか頑張るしかないと思って、そっからもう考え方を切り替えて、いきましたね。」など、社会で生きていくことを考えたり頼れる人がなかなか居ない環境になったりして自分の力で適応していこうという気持ちになっている様子である。

〔要求しなきゃ生きていけない〕は、「コミュニケーション取るって言っても、聞かなきゃいけない時があったらやっぱりそれは聞かなきゃいけないですし、それはもう最後まで聞きます。」「仕事に入ると、ま・いっかって思う事はできない・から必ず聞くようにしている。それか後で聞く。」など、生きていく上で必要な場合には、自分から要求しなくてはこの気持ちになっている様子である。

<行動カテゴリー>

(6) 【割り切る】

このカテゴリーは、〔コミュニケーションが取れる人取れない人〕〔受け入れて前へ進む姿勢〕の2つの概念から構成された。

〔コミュニケーションが取れる人取れない人〕は、「コミュニケーションが取れる人と取れない人とカテゴリーがもう、自分の中でもう整理されちゃうので。」「例えば分かりやすい人だったら、ちょっと期待・を持って、・・分からなかった人・よりは、自分からも聞いたり・するようにしたり、してるんですけど、分からない人には、自分からは聞かないようにしたり、うん、そういうふうにかう分けて、で・もう最初からかういうふうにやっていった方がお互いに疲れない・とと思って、そういう気持ち・でコミュニケーションを取ってる・と思います。」等のように、聴覚障がい者が聴者を2つのパターンとして捉えて接していることを示している。

〔受け入れて前へ進む姿勢〕は、「しょうがないからこそ、出来ることは何？っていうのを前向きに考えていくしかない。」「もう・最初から、通じないのが当たり前・って思いこんで、通じたら・ラッキーくらいに思って、でも、ちゃんと・最初から丁寧に伝えるようにするみたいな気持ちでやって、コミュニケーション取ろうとしています。」など、コミュニケーションの障壁や障がいを受け止めて、出来ることをやろうという姿勢である。

(7) 【予測する】

このカテゴリーは、〔聴者の気持ちを視覚で察する〕〔経験からの推測〕の2つの概念から構成された。

〔聴者の気持ちを視覚で察する〕は、「聞こえない分、声とかで相手の感情・感情が分からないから、表情と

か・見えるもので、判断しなければいけないから、多分・けっこう・目配りは、してると思います。」「自分が実際に耳聞こえないんだって言うと、えっ？とかこう、驚きの顔されると、あ、これはもうダメなんだなって分かっちゃうんですよ。」など、聴者の表情など視覚で得られる情報から心情を察して行動していることがうかがわれた。

〔経験からの推測〕は、「私はずっと東京に居るから、電車が・なんか止まっても、すぐに動くだろうと思うから、すぐには行動しない。でも止まってる時間が長いと、その時・周りにいる知らない人たちの反応を見る。」「大体・3回くらいは、コミュニケーションを取ってれば、変わる人と・変わらない人、が別れる感じなんですよ。今までの経験だと。」など、今までの経験で判断し、行動する習慣がついていることが示された。

総合的考察

聴者とのコミュニケーションの障壁においての聴覚障がい者の体験は、コミュニケーションの難しさから繰り返し【通じない体験】や【誤解や差別の体験】を重ねるうちに、【否定的な自己イメージ】と【聴者に対する抵抗感】が形成されている。そして、そのうち【諦めと切り替え】の気持ちに変化し、聴者に理解されない部分を【割り切る】ことで日々の必要最低限の関わりを続けている。また、【否定的な自己イメージ】や【聴者に対する抵抗感】、【諦めと切り替え】の気持ちは、聴者との関わりにおいて視覚情報や経験から【予測する】ことにつながり、そこから誤解が生まれることも少なくないようである。

今回の調査では、コミュニケーションの障壁というネガティブな条件であったため、体験や感情もネガティブなものに限定されている。しかしながら、行動においては体験や感情を受け入れて前向きに進んでいこうとする姿勢や経験からの対処行動が示され、聴覚障がい者が日常的に感じている違和感や不安をどのように受け取り、行動に反映させているのか大まかな流れを明らかにすることができた。

展 望

今回の調査では、7名の協力者を対象に質的研究を行ったが、聴覚障がい者の中でも言語取得前に障害が発覚し、かつ両親が聴者である18～30歳の方々であり限定的である。そのため、中途失聴者や老人性難聴の場合は違った結果に成り得る。また、聴覚障がい者と聴者の関係を検討する上では聴者を対象とした調査も必要である。

【予測する】という行動に見られた表情に敏感な面について、聴者の対人不安とは異なる可能性があるものでそのことも今後の課題としたい。

引用文献

- 木下康仁(2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 —質的研究への誘い— 弘文堂
- 松浦正一・山下由紀子 (2007). 聴覚障害者への心理臨床的課題—臨床心理研究の新しい課題について— 聖マリアンナ医学研究誌 82, 123-128.
- 永石 晃 (2012). 聴覚障害児・者への心理的支援の前に考えたいこと 臨床心理学 12 (6), 873-878.
- 津名道代 (2005). 難聴 知られざる人間風景 (上) 文理閣
- 滝沢広忠 (1999). 聴覚障害者の心理臨床—今後の課題 村瀬嘉代子 (編著) 聴覚障害者の心理臨床 pp,147-170
- 鳥越隆士 (2008). 聴覚障害児のコミュニケーションと心理的援助 村瀬嘉代子・川崎佳子 (編著) 聴覚障害者の心理臨床② pp,75-95.
- 山口利勝 (1998). 聴覚障害学生 of 心理社会的発達に関する研究—健聴者の世界との葛藤とデフ・アイデンティティの影響— 教育心理学研究, 46, 422-431.
- 2015. 1.31受稿, 2015. 3. 7 受理—

An Interview Survey about the Barriers to Communication with People Who can Hear as Perceived by Deaf People

Tomomi HENMI (*Tokyo Seitoku University*)

Ikuo ISHIMURA (*Tokyo Seitoku University*)

The objective of this research is to clarify the process of how deaf people experience, feel about and recognize the barriers to communication with people who can hear and what types of actions they take to cope. To make this clarification, this research focused on the existence of barriers to communication in the forming of relationships between deaf people and people who can hear and conducted interviews with deaf people, who shared their stories. About a half-hour long semi-structured interview was conducted on 7 deaf participants (5 male and 2 female) between the ages of 18-30. Video and audio recordings of these interviews were taken, and a word-for-word record was later created. The analysis was conducted using the M-GTA, and 18 concepts and 7 categories were created. The seven categories were: (1) experiences of Misunderstanding and Discrimination, (2) Experiences of not Communicating, (3) Negative Self-Image, (4) Antipathy towards People Who can Hear, (5) Resignation and mental Shift, (6) Finding a Clear Division, and (7) Making Predictions. The results show that deaf people's feelings of antipathy towards people who can hear, feelings of having a negative self image, and feelings of resignation and switching the subject are changed through having experiences of not communicating and feeling misunderstandings and discrimination when attempting communication with people who can hear. These results also show that the behaviors for coping that are taken by deaf people are making predictions and finding a clear division in their relationships with people who can hear.

Keywords: deafness, miscommunication, interview survey, M-GTA

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2015, Vol. 15, pp. 156-162